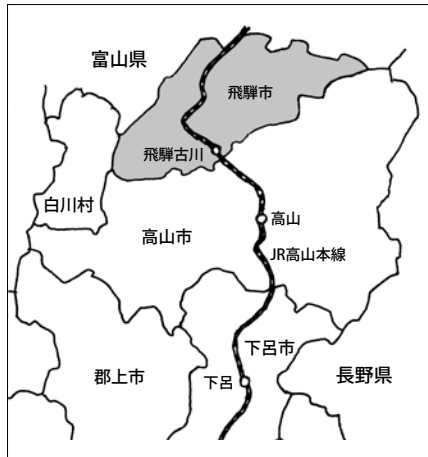


飛騨市農村部の民家

(社)飛騨市観光協会

山腰明彦



岐阜県北部の地図。飛騨市は2004年に古川町、神岡町、河合村、宮川村が合併して誕生

家は今までもあまり注目されてこなかったのが実情である。そこで今回は、飛騨市農村部の民家の変遷と特徴について報告したい。

民家の特徴を生み出した歴史的背景

まず、飛騨市農村部の民家の特徴を生み出した歴史的背景から紹介する。

■幕末まで

飛騨の山村地帯の民家は、白川郷の合掌造りなどで見られるような茅葺きの屋根だった。造りは合掌(切り妻)もしくは入母屋である。屋根は、雨漏りや積雪を防ぐため急勾配で作られた。

当時の山村地帯では、自家用中心に生糸を生産するため養蚕が行われていた。それには二階の一部分を使っていたと思われるが、茅葺き家屋では二階に作業スペースを広くとることができず、また養蚕の弊害となる湿気と雨漏りへの対策が課題であった。

■明治中頃から末期

明治に入っても養蚕は細々と行われていたが、生糸の需要が飛躍的に高まるにつれ、明治中頃には多くの農家が養蚕を始めた。今に残る飛騨市農村部の民家は、この頃から養蚕向きに建てられたものがほとんどである。

それらの民家は、以下のような特徴を持っている。

第一に、間口六〜七間、奥行き四〜五間の大きな家が多い。蚕を大量に飼う広いスペースを確保するためであり、二階のすべてを養蚕の作業スペースとした。

第二に、屋根に「樽板葺き」が取り入れられた。これは、堅い栗材を剥いで作った長方形の板を用い、板の短辺を棟の方に向け、軒から棟に向けて順次板をずらしつつ重ねていく葺き方である。板の上には川石を置いて板を固定した。茅葺きから樽板葺きが変わったのは、雨漏り対策と、「茅場」が養蚕の拡大で桑畑に転換され茅が不足してきたことが要因であった。

第三に、樽板葺きを取り入れられるに伴い、樽板がずれたり剥がれたりすることがないよう屋根の傾斜が緩やかになった。

■昭和以降

昭和に入ると、亜鉛葺きが樽板葺きに取って代わった。樽板葺きは、強風が吹くたびに板が飛ばされてしまう。雨漏りは少ないものの、一度板が飛ばされるとその被害は大きかった。それに比べ、亜鉛葺きは風に強く、長持ちする。また、樽板の材料となる栗の木が減少し樽板の価格が高騰する一方、樽板を作る板へぎ職人が少なくなっただけでなく、亜鉛葺きの普及

以上のような歴史を経てきた現存する農村部の民家の特徴を改めて見てみよう。

■外観

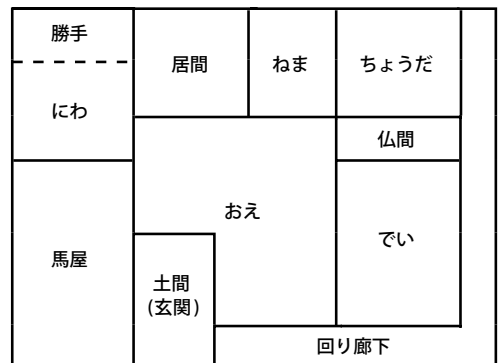
第一に、主屋の間口は六間から七間、奥行きは四間から六間という大きな長方形の建物である。

第二に、切り妻で平入りの家屋構造を採用している。

第三に、主屋の屋根の勾配はとて緩やかで、地面に張り出すような長い軒を持つ。

飛騨の養蚕は、昭和四〇年(一九六五年)代に生産量のピークを迎えるが、その後、養蚕の担い手の高齢化、青年層の農業離れなどにより衰退し、今日では養蚕農家は完全に姿を消してしまった。

現存する民家の特徴



飛騨の養蚕農家の標準的な間取り(1階)



飛騨に多く見られる養蚕農家(飛騨市古川町数河地区)。(上・正面)間口8間の大型の建物で、平入り。1階と2階の間に底を持つ(下・妻側)屋根は切り妻。緩やかな勾配は樽板葺きの名残り、今は垂鉛葺き。長い軒は風雨や雪から蚕を守る

緩やかな勾配は、養蚕の作業スペースである二階の空間を少しでも広く取るためであり、樽板がずれないためのものである。また長い軒は、湿気に弱い蚕を風雨や夜露、雪から守るとともに、建築当時主流だった障子張りの窓を守るためだったといわれている。

このどっしりと大きい緩やかな屋根は飛騨の農村のそこかしこに見られ、日本の原風景ともいえる穏やかな表情を醸し出している。

第四に、大半の民家には一階と二階の間全体に庇が付けられている。幅は三尺ほどで、柱に腕木を取り付けて出し桁をのせた腕木庇がほとんどである。庇は雪を防ぐ機能を持つほか、二階の窓から簡単に出入りができるため、日当た

りのよい庇の上に山菜や雑穀類、紙漉きの原料であるコウゾを置いて干すなど、作業スペースでもあった。

第五に、馬屋が主屋の中にある。家畜は主に馬と牛であり、農作業の働き手としてだけでなく、「馬」という家畜の出稼ぎ制度があり、米の稼ぎ手としての役割も果たしていた。現在は家畜がいなくなったため、ほとんどの家で馬屋は改装されてしまったが、玄関付近の頑丈な帯板などにその名残りを認めることができる。

■内観

基本的な間取りは、土間(玄関)の左右どちらかに「おえ」、もう一方に「馬屋」がある。おえの奥(馬屋の反対側)が「でい」と「仏間」、そして土間の奥には家人のための囲炉裏のある「居間」、「勝手」があり、炊事・食事・団欒スペースとなっている。(間取り図参照)

各部屋の機能は以下のとおり。
 〈おえ〉板の間で、囲炉裏があり、玄関のすぐ隣にある。飛騨でも、地区によって「座敷」「広間」などと呼び方が異なる。主に冠婚葬祭や、炉辺で客を迎える際の簡単な応対の場として使われ、客をもてなすための囲炉裏が備わる。

〈でい・仏間〉おえの奥(馬屋の反対側)が「でい」で、その隣が「仏間」である。でいは正式な応接間として使われる。仏間には一〜二間幅の非常に大きな仏壇が置かれている。「でい・仏間」と「おえ・土間(玄関)」の境は建具で仕切られているだけである。集会場がなかった建築当時は、冠婚葬祭の行事はすべて自宅で執り行われ、その際はでいやおえの仕切りを取り外してひと部屋にし、大人数を家に招いたという。

暮らしの変化で失われる伝統的な姿

飛騨ではどの農家にも、おえ、でい、仏間の三つの部屋がある。これは来客を快く迎え入れ、集落の係わり合いを大事にする人々の気風から生まれたものであろう。

しかしながら今日では、このような伝統的な間取りは減少する一方である。おえの広い板の間は、寒さ対策のため、床に畳やカーペットが敷かれ、天井が張られ



わずかに残る茅葺き屋根の民家(飛騨市神岡町山之村地区)

るなどの造作がされつつある。冠婚葬祭を自宅で行うことがなくなり、かつては大切なお客様を迎えた部屋が物置となっているケースも少なくない。特に、民家のシンボルともいえる囲炉裏を今も使用している家はほんのわずかである。

また、茅葺きの民家は、飛騨市全域でわずか三軒となってしまう。「結」が機能しなくなったため、大量の茅の確保がむずかしく、また葺き替え作業に大きな経費がかかるようになり、維持がむずかしくなっている。

一方、近年、茅葺き屋根の風格ある素朴な佇まいが見直され、遠方から見学者が訪れる例も多く見られる。飛騨の伝統的な民家と景観を、人が住み続けることで次代に残していく方法を編み出していく必要がある。